

## ミシェル・アンリ哲学における

### 宗教思想家としてのカフカ

佐藤 勇一

はじめに

本稿は、ミシェル・アンリ哲学におけるフランツ・カフカの位置づけを考察するものである。多くの哲学者が独立したカフカ論を残しているが、アンリにはそうしたものがあ<sup>(1)</sup>るわけではない。しかし、『現出の本質』（一九六三年）、『実質的現象学』（一九九〇年）、『我は真理なり』（一九九六年）、『キリストの言葉』（二〇〇二年）など、アンリは自著のさまざまな箇所<sup>(2)</sup>でカフカに言及しており、我々はアンリの思索的生涯を通じて現れる彼のカフカ読解を追跡することができる。アンリは、カフカを「宗教思想家」(EM, 514)と見なす。このような読解は、カフカに神学を持ち込むことを慎重に避ける傾向にある哲学者による読解の中では特異な位置にあるが、カフカの解釈史の中ではとりたてて珍しいものではないだろう。カフカの作品に神の摂理と人の世の隔たりや、神の恩寵を見たり、ユダヤやシオニズムとの関連を考察したりするなど、カフカと宗教に関しては

様々な解釈があり得る。では、アンリにとってカフカはどのような意味で宗教思想家なのか、以下、アンリ哲学の特徴とともに考察する。

## 1 カフカと真理への道

文学、とくにカフカの作品は、アンリの哲学を理解するひとつの入り口として欠かすことのできないものであるように思われる。アンリは、哲学上の作品を著す一方で、一九五四年に『若き将校』<sup>(2)</sup>（一九四八年執筆）を出版し、一九七六年に『愛は瞳を閉じて』<sup>(3)</sup>でルノードー賞をとり、一九八一年に『王の息子』<sup>(4)</sup>を出版するというように、継続的に小説を執筆したことも知られる。哲学者であるとともに小説家でもあった彼にとって、カフカは、モリス・メルロー・ポンティにとつてのマルセル・ブルーストやポール・ヴァレリーののように、哲学上の重要な参照作家でもあったが、それだけでなく同じ小説家として「称賛」<sup>(5)</sup>の気持ちを抱く存在でもあった。

哲学者アンリは、解釈者と創作者の二重の立場で、文学やカフカの作品に惹かれた。だが、それらの立場は彼の中で互いに乖離しあつたりはしないのか。そもそもアンリにとって、哲学と文学はどのような関係にあつたのか。こうした当然思い浮かぶ問いに対して、アンリはいくつかの機会に答えている。或る対談では、彼は激しい労苦をともなう哲学的分析と、問いを立てずに自由に没頭する文学的創作との間で迷いがあったと率直に認めている(PV-III, 309-311)。しかしその一方で、アンリは小説でも「パトス的な生」(PV-III, 313)と想像の内的な結びつきを探究したと言ひ、別のところでは、文学と哲学が「真理を語ろうとする意図」(AD, 224)を共

通してもつと主張する。彼にとって小説の執筆は、哲学の労苦を紛らわす手慰みではなく、真理を表現する別の仕方であり、カフカへの評価も真理との関係で行われる。

君がその上に身を支えている地面が、それを覆っている二本の足よりも広いことがありえないなんて、なんと幸運なのだろう。(NS-II, 118 [140] JI, 253)

カフカが一九一七―一八年のノートに記し(NS-II, 46 [49])、一九一八年一月以降の「アフォリズム集成」に再び書きつけたこの言葉は、『現出の本質』第三七節「内在の内的構造」において、まさにその構造を示すために引用される(EM, 361)。アンリは、この言葉を「存在が、存在それ自身であるこの完璧な一致において、自らであるところのものである」ような、「一体性における存在の構造」(EM, 361-362)を示すものだとして解釈した。カフカの言葉は「いっさいの明白な哲学的文脈の外の言葉」(EM, 506)ではあるが、絶対的な生の内的構造を哲学的に分析しようとするアンリからすれば、「根源的で普遍的な構造における真理それ自身」(EM, 361)を言い当てたものである。

しかし、アンリにとって、カフカの重要性は真理を語ったという点にとどまらない。『現出の本質』第四六節では、「探し求める者は見出すことがないが、求めない者は見出す」(NS-II, 63 [72], JI, 300[247], EM, 506)といったカフカの断片的な言葉がいくつも引用され、知や認識を用いた探究によっては真理に到達できないが、この不可能性を通じて真理を見出すと主張される。

知を手段としては本質に到達できないという不可能性は、本質の非存在をあらかじめ前提しているのではなく、かえってむしろ、本質の内的構造の積極性の内に根づいていること、このことを、宗教思想家カフカは彼なりのやり方で認めていたにちがいない。<sup>(6)</sup> (EM, 514)

認識による探究にとつて、「くへ向かうこと(se diriger vers, se tourner vers)」でかえつて「くから身をそらすこと(se détourner de)」(EM, 350, 506)になり、真理探究は「道に迷つてしまふ」(EM, 507, JI, 244)。しかし、自分自身にとどまる生の本質は、認識によつて外へと「向かうこと」はできないが、この超越の不在を通じて、自らが「安らう」(EM, 35)場所を構成することができる。カフカの言葉は、哲学と同じ真理を語っただけでなく、真理探究の困難とその乗り越えをも示した言葉であった。

「真理」それ自身、そして、紆余曲折のある真理探究の「道」、この両面でカフカは我々をアンリ思想へと導く入り口となり得る。

## 2 知恵の木と生命の木

アンリは、カフカを「宗教思想家」と呼び、真理探究の道を示す先達と見なした。アンリはカフカの思想のどのような点からそう解釈したのか。この節では、カフカの言葉の解釈を通じて、アンリの見解の妥当性を検討する。

『現出の本質』でアンリが引用するカフカの文章は、「八つ折りノート」GとH、および、「アフォリズム集

成」に出典が限られている。<sup>(7)</sup> 一九一七年一〇月に書き始められた「ノートG」と、一九一八年一月から書き始められた「ノートH」は、日記というよりアフォリズム集であり、「アフォリズム集成」は、これらのノートからカフカ自身が抜粋し、一九一八年二月以降、紙片にペンで清書していったものである。したがって、アンリの引用する次の二つの断片は、ほぼ同時期に書かれ、カフカ自身によって推敲を重ねられており、意味がとりにくかったとしても、同時期の他の断片とともに解釈すれば、それによってカフカが言わんとしたことを考察することも十分可能なものである。

真理と虚偽、ただこの二つのものしか存在しない。真理は分割できないものであり、それゆえ自らを認識できない。真理を認識しようとする者は、虚偽とならざるをえない。<sup>(8)</sup> (EM, 508, NS-II, 69 [81], JI, 269)

信仰が意味しているのは、自己の内に不滅のものを解放すること、より正確には、自らを解放すること、もっと正確に言えば、不滅であること、さらに正確に言えば、存在することである。(EM, 510, NS-II, 55 [61], JI, 298(245))

一つ目の断片における分割できない真理と、二つ目における「不滅のもの(das Unzerstörbare, l'indestructible)」は、同じものと見なすことができる。「不滅のもの」は分割できない。「不滅のものは一つである。個々の人間はそれぞれあり、同時にそれは各人に共通している。だからこそ人間はとてつもなく固く結びつく」(NS-II, 66 [76])。しかし、認識は、認識するものと認識されるものの分割や隔たりを前提としているため、この「不

滅のもの」を捉えられない。認識の真理と不滅のものという真理は別の真理である。この二つの真理は、アンリが引用していない以下の三つの断片から理解することができる。

我々には、認識の木と生命の木によつてあらわされる二つの真理がある。活動者の真理と安息者の真理である…。(NS-II, 83-84 [100])

神によれば、知恵の木の実を食べれば、即座に死にみまわれるものだった。誘惑の蛇によれば：神と等しいものとなるはずだった。ともに同じく間違っていた。人間は死なず、死すべきものとなり、人間は神とは等しくはならず、神と等しくなるために欠かせない能力を得た。ともに同じく正しかった。人間は死ななかつたが、楽園の人間は死んだ。神とはならなかつたが、神のような認識者となった。(NS-II, 73 [86-87])

原罪の後、我々は善悪の認識能力において本質的に似ている。：誰も認識だけでは満足できないが、認識に基づいて行動しようと努めずにはいられない。(NS-II, 74 [88-89])

ここでは、「認識の木」と「生命の木」によつて、それぞれ、認識の真理と不滅のものが示されている。生命の木が象徴する「不滅のもの」は、「神と等しいもの」となつて安らぐ「安息者」の真理である。人間は「認識の木」の実を食べたために「善悪の認識能力」をもち、「生命の木」の実を食べなかつたために、墮罪後の人間は「神と等しいもの」にはなれず、「神のような認識者になつた」。そして、善悪を分割する認識では、善

そのものである不滅のものという真理を捉えることができず、人間の認識は「虚偽とならざるをえない」。しかし、これは認識によって不滅のもの「壊されないもの」が壊されたことを意味しない。「我々は〈楽園〉を追われたが、〈楽園〉はそのために壊されてしまったわけではない」(EM, 507, NS-II, 72 [86] JI, 302(249))。つまり、楽園は不滅だが、認識が不滅のものを捉えそこなっているに過ぎない。不滅のものは、信仰によつてはじめて「自らを解放する」のであり、認識によつて近づくと遠ざかってしまう。そのため、「誰も認識だけでは満足できない」が、それでも不滅のものに安らおうと間違つた努力をし、「行動」し続けてしまう。楽園を追われるということ、それはカフカにとつて、真理から逸れても真理を求めて彷徨うこと、「安息者」から「活動者」に墮してしまふことを意味している。

以上のように、カフカのアフォリズム諸断片からも、不滅のものという真理と、真理を求めて道に迷う認識という、アンリがカフカに見出した二面性を読みとることができる。カフカを真理および探究の道との関係で考察するというアンリ独特のカフカ解釈は、十分可能なひとつの解釈だと言えよう。また、「個々の人間はそれであり、同時にそれは各人に共通している」という不滅のものもつ性格や、楽園と墮罪という主題を見るならば、アンリがカフカを「宗教思想家」と呼んだことにも一理あつたと、ひとまず言っておくことができる。

### 3 絶対的・以前と真理への道

これまで見てきた『現出の本質』でのアンリのカフカ読解において、すでにその後のアンリの哲学探究の道の目指していたものが垣間見える。それは、認識を逃れる存在の内的構造を了解すること、生命の木のもとで

不滅のものに憩うことである。ポール・オーデイの表現で言えば、「ヘデンの園を追放される前のアダムの経験」であり、生の享受を世界への関心に置き換える前の、すなわち、知恵の木の実を奪う以前のアダムの純真<sup>(9)</sup>さである。アンリは彼が「絶対的・以前」(CMY, 199)と呼ぶ、墮罪以前の状態を重視する傾向があり、この点でメルロ＝ポンティとは対照的<sup>(10)</sup>である。

メルロ＝ポンティは、ニコラ・マルブランシュの『形而上学と宗教についての対話』の「対話IX」における「建築家の栄光」(Union, 42)と「人間の自由な自己犠牲によって神が獲得するそれ〔栄光〕」(SNS, 92)の区別に注目<sup>(12)</sup>する(SNS, 92-93, Union, 42, Nature, 184-185)。「対話IX」では、〈完全な存在である神が、何故被造物を欲するのか〉という神の意志をめぐる問いが出され、二つの「神の栄光」が区別された。前者は、建築家が快速で優れた建築物を建てた時に密かな満足を感じるように、創造神が自らの業に満足を得ることである。それに対して後者は、イエスの犠牲が世界の神聖化を成就することによって、神が得る栄光である。ここでは、墮罪以前の神の栄光と、受肉した神の栄光が対比される。

メルロ＝ポンティは、「対話IX」のマルブランシュが、人祖アダムによる墮罪以前に神が創造した世界よりも、イエスによって贖われた世界を重視したことを高く評価する。建築家としての神の栄光は、出来上がった世界を回顧的に我々の背後に想定する「一種の墮罪以前の偏見」(VI, 165)に陥ってしまうのに対し、受肉した神の栄光には、「未完の作品」(Parcours, II, 40)、開かれた世界、前望的歴史が対応している。発生は、前者ではすでに完了した「出来事(événement)」であったのに対し、後者では来たるべき「到来(avènement)」である。受肉した神の宗教、「神の死」(Primit, 72)の宗教では、人間やその歴史がなければ、神は神たりえない。だが、このような無力な神の世界のその開かれた性格の故に、メルロ＝ポンティはこれを、二〇世紀の哲学が語るべ

き知覚された世界や、歴史の偶然性を先取りしたものと見なす。

これに対して、アンリは、墮罪する以前の生命の木のもとの安息、知恵の木の実を食べて世界への関心をもつ以前の生の享受を重視する。とはいえ、これはマルブランシユの「建築家の栄光」を讃えることを意味しない。

そのうちで各々の生けるエゴが生み出されることになる（生）の自己出生は、このエゴにとつては絶対的、「以前を意味している。それは、エゴに先立って、エゴなしに、ダビデ以前、アブラハム以前に——『世界が存在する以前に』——実現されたものである。（CMV, 199）

アンリが「絶対的・以前」と言うことで問題にしているのは、「建築家の栄光」ではなく、そうした世界の創造以前の生である。「世界が存在する以前」、「アブラハム以前」、これらが意味しているのは、ヨハネ福音書におけるイエスの存在である。「はつきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『私はある』（ヨハネ八・五八）。アンリにとつて、イエスは、アブラハムやダビデが象徴する「この世」に先立つ、「最初の生者」である。アンリは、イエスという受肉した神とその栄光を、ヨハネ福音書を引くことによつて讃える。「言は肉となつて私たちの間に宿られた。私たちはその栄光を見た」（ヨハネ一・一四）。「生の言」、「神のひとり子」であるイエスを介して、絶対的・以前の安息へと至るのであり、「各々の生けるエゴ」がそれら自身の生を享受し得る。

とはいえ、アンリの言う受肉した神の栄光、「世界が造られる前に、私がみもともつていたあの栄光」（ヨ

ハネ一七・五)」（*CMV*, 117）は、メルローポンティ（マルブランシュ）が強調した「未完の作品」の栄光、「人間の自由な自己犠牲によって神が獲得する」栄光とも異なることに注意しなければならない。アンリからすれば、メルローポンティが評価した「未完の作品」としての世界であつても、「この世」と関わるものであり、世界以前ではない。この意味では、アンリにおいて、肉は世界の肉を意味しない。また、受肉した神の栄光は、贖罪の栄光、つまり、イエスの自己犠牲による栄光を意味するわけでもない。アンリにおいては、「神の死」、イエスの十字架上の死は描かれず、あくまでも最初の生者たるイエス、「肉となつて私たちの間に宿られた」イエスの姿のみが描かれる<sup>(13)</sup>。アンリにとつて問題なのは、何らかの仕方ですべて「この世」と関連するような発生だとか贖罪の死ではなく、イエスとともに神の子であることである。アンリは、カフカに言及した際にも、「個々の人間はそれであり、同時にそれは各人に共通している」不滅のものと、この真理へと至る道に注目していた。同様に、受肉に言及する際にも、「各々の生けるエゴが生み出されることになる（生）の自己出生（*auto-engendrement*）」という真理と、イエスを介して生の自己享受に至る道に注目する。受肉した言、すなわち、イエスは、ヨハネの言うように、真理であるとともに、真理への道でもある（「私は道であり、真理であり、命である（*C'est Moi la Voie, la Vérité, et la Vie*）（ヨハネ一四・六）」（*CMV*, 159））。

#### 4 幸いなる生への導き

以上のように、アンリのキリスト教解釈は、ヨハネ福音書の受肉した言による救済を強調し、「この世」に関わる発生や贖罪の死を扱わないという特異なものであつた<sup>(14)</sup>。ここには、ヨハン・ゴットフリープ・フィヒテと

共通したある種の解釈の歪みがある。<sup>(15)</sup> フィヒテは、『幸いなる生への導き』において、アンリと同じく、もっぱら共観福音書よりも「最も真正で純粋な文書」(ASL, II-5)であるヨハネ福音書を用い、世界と贖罪の死を排除した。「イエスはヨハネでは確かに世の罪を取り除く神の子羊であります。しかし、決してその血によって怒れる神に対して罪を贖う子羊ではありません」(ASL, 87-88)。ヨハネ自身は、「言は世にあつた」(ヨハネ一・一〇)と言つて世界を排除してはならず、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ」(ヨハネ一・二九)と言つて贖罪を認めてもいるだけに、フィヒテとアンリの解釈は奇妙なものだと言えよう。

この特徴は、アンリのカフカ解釈にも独特の歪みを与えている。カフカを解釈するにあたり、アンリはカフカに世界の蔑視とは別の一面があることを示唆してもよかつたはずだが、そうしなかつた。例えば、アンリの小説に眼を向けてみれば、世界に対して「こまかな注意」<sup>(16)</sup>を向けおり、彼に世界への軽蔑とは別の側面があつたことに我々は気付く。<sup>(17)</sup> そんな彼なら、カフカの小説の世界描写に眼を向けてもおかしくないのだが、実際にはそうしてはいなかつた。また、ピエール・クロソウスキー——アンリが引用で用いたカフカの仏訳『日記』の訳者。『日記』「序文」で、アンリと同じくカフカを宗教思想家と見なした——によれば、カフカの著作には、「メシアの王国」の待望、「救済」を求める信仰が見られるが、この救済には「聖性(santete)」と「健康(sante)」(JI, II(9))への希求が結びついており、カフカはこの世を必ずしも断念してはいない。しかし、この「序文」を読んだはずのアンリがそうしたことに注目することもなかつた。<sup>(18)</sup>

アンリにとつての救済は、フィヒテと同様、世界や死と関わるのではなく、生が自己を感じとるといふ生の情感性によつてもたらされるものである。生の本質の内部構造には逃れ得る外部がないが故に、「各々の生けるエゴ」は自己を被り苦悩する。しかし、その苦悩に耐えることで、生者は自己を享受し、「幸福(Seligkeit,

beatitude)に達し得る。幸福が備わるのは、生の本質の中であり、世界や死の中ではない。

苦悩が苦悩であるのは、ただこの世でだけである。…この世で苦悩と呼ばれているものは、別の世界では、なんら変わらないながら対立物から解放されて、幸福となる。(EM, 842-843, NS-II, 135 [157], JI, 276)

ひとは苦痛の感情の内でさえ、少なくとも自らを感じ自己自身を所有しているのであり、このことだけでもすでに表現し難い幸福をもたらす。(EM, 842, ASL, 97)

これらの引用文は、アンリが『現出の本質』第七〇節で並べるように引用したものであるが、前者はカフカの「アフオリズム集成」から、後者はフィヒテの『幸いなる生への導き』から引いてきたものである。アンリは、ここで、カフカをフィヒテとともに解釈し、苦悩・享受によつて成就される「幸いなる生」を描いている。「各々の生けるエゴ」は情感性を被り、生者たらしめられる受動的な存在である。しかし、それ故に生者は幸福や生の享受に至る。このような生者と生者を生者たらしめるものとの関係について、アンリはカフカの言葉を引きつつ次のように表現する。

私が立っている地面は、それを覆う二本の足よりも決して広くはない。なぜなら、生の神秘とはこのようなものだからである。つまり、生者が彼のうちにある生の〈全体〉と共外延的であり、また、生者におけるすべてが彼自身の生だからである。生者は、自分自身を根拠づけたのではない。彼は生であるところの

〈基底〉をもつ。(PM, 177)

アンリは、『実質的現象学』第三章「共・パトス」で、「君がそのうえに身を支えている地面が、それを覆っている二本の足よりも広いことがありえないという幸運」(PM, 162)という、『現出の本質』でも引用したカフカの言葉を引いて、彼が「基底(Fond)」と呼ぶものに言及する<sup>19)</sup>。基底は、フィヒテなら「生、すなわち、この直接的な神的現存在における一切の生ける実体的な現存在の、ただし眼差しに対しては永遠に隠されたままである現存在の最深の根拠(Grund, fondement)」(ASL, 80, EM, 380)と言うような、あらゆる生者に生を与える根拠である。アンリにとって、「地面」は生者を生者たらしめる「生」の自己出生」を、「二本の足」は「各々の生けるエゴ」の受動的な自己感得を象徴しており、これらが一致するというカフカの言葉は、「各々の生けるエゴが生み出されることになる〈生〉の自己出生」という「絶対的・以前」の真理を現している。アンリはすでに『現出の本質』においてカフカの言葉を真理の表現と見なしていたが、これは『実質的現象学』でも同様である。

だが、既述したように、アンリは、カフカを解釈する場合でも、受肉した言を解釈する場合でも、それらが真理を表現しているだけでなく真理の道行きを表現していたことにも注目していた。最後に、ヨハネ解釈においても、真理に至る道にも眼が向けられていることについて、『我は真理なり』や『キリストの言葉』でのカフカへの言及を用いて確認する。

## 5 オクラホマ大劇場、私は門である

私の父の家には住む所がなく、さんある。もしなければ、あなたがたのための場所を用意しに行くと言ったであろうか。行つてあなたがたのための場所を用意したら、戻つて来て、あなたがたを私のもとに迎える。こうして、私のいる所に、あなたがたもいることになる。(ヨハネ一四・二―三)

『我は真理なり』第七章『子の内の子』としての人間<sup>(20)</sup>には、カフカの長編小説、『失踪者』への言及が見られる。ここでアンリはやはりヨハネ福音書を参照しつつ、「各々の生けるエゴ」である人間が、この世の血統とは別に「神のひとり子」であるイエスを通じて、皆「神の子」であるという、或る種の共同体や、共同体に入る道を考察する。共同体は、先程確認したカフカの言葉への言及箇所、『実質的現象学』「共・パトス」の章ですでに示唆されていた<sup>(21)</sup>。「基底」である「地面」は、生者である「二本の足」にとつての地面であるだけでなく、他の生者の足にとつての地面でもある。アンリは、『我は真理なり』において、ヨハネ福音書の「住む所」や「あなたがたのための場所」を、こうした生者のための場所と見なしている(CMV, 158)。そして、このヨハネ文書と、『失踪者』「オクラホマ野外劇場」の章の或る文章が重ね合わされる。それは、主人公カール・ロスマンが或る街角で見つけたポスターの文章である。

本日早朝六時より真夜中までクレイトンの競馬場においてオクラホマの劇場要員を募集！オクラホマ大劇場が諸君を呼んでいる！募集は本日限り、一回のみ！今このチャンス逃す者には永遠にチャンスは巡つてこ

ない！自分の前途を思う者は来たれ！誰でも歓迎！芸術家たらんと欲するものは申し出よ！わが劇場は各人を適材適所に採用！決意をした者にはこの場ですぐに祝辞を！とはいえ、夜中までに間に合うよう急げ！十二時にはドアというドアは閉され、もう開くことはない！我々を信ぜぬ者はくたばるがいい！クレイトンへ行こう！(CMV, 165, *Amerika*, 305 [308])

「オクラホマ野外劇場」は、二年近く執筆を中断したままであった『失踪者』の最終章として書かれたものである。<sup>(22)</sup>このポスター文には、たしかに福音書の文章と比較し得る宗教的な響きが認められる。<sup>(23)</sup>「誰でも歓迎」し、「各人を適材適所に」配置する劇場は、「住む所がたくさん」あり、「あなたがたのための場所」が用意される「父の家」、つまり神の神殿と重なりあうだろう。「父の家」はイエスにとって「私のいる所」であり、そこに「あなたがたのための場所」が用意される。イエスを通じて、すべての生者が存在し得る「絶対的ここ」(CMV, 165)、つまり「基底」に支えられた共同体へと至る。イエスは、いわばこの共同体に入る「門」であり、真理への道である。「私は門である。私を通して入る者は救われる」(ヨハネ一〇・九)。

しかし、誰でも即時入ることのできるというオクラホマ大劇場の呼びかけは、胡散臭くも<sup>(24)</sup>ある。本当に誰でも劇団の一員となることができるのか。これまで、共同体への帰属を目指しつつ、どの共同体からもドロップ・アウトしてきた主人公カールにとっては、ポスター文は魅力的ではあるが用心すべきものでもあった<sup>(25)</sup>だろう。フアリサイ派の律法主義者は、我々がポスター文に対して感じるのと同様の胡散臭さをイエスの言葉に感じ、「神のひとり子」イエスに身分証明を求める。

こうした皮肉な問い、あるいはもつと辛辣な問い、たとえばファリサイ派の人々がキリストに投げかけた「あなたの父はどこにいるのか」(ヨハネ八・一九)という問い、さらに悲劇的なことだが、「天は黙りこんでいる。天とは沈黙のこだまにすぎない」(カフカ)とあっさり断定してしまう現代人の醒めたつぶやき、そうした問いやつぶやきを発する人間たちが忘れてるのは、まさに次のことである——この〈言葉〉とはどのような言葉なのか。彼らは何も聞えないと言っているが、この〈言葉〉が我々に語りかけるのは、彼らが考えているのはまったく別の仕方においてであって、だからこそ、彼らには実際に何も聞えないのだ。(PC, 133)

『キリストの言葉』に引用されているこのカフカのアフォリズム(II, 299(246))は、『現出の本質』でも、認識の真理を批判するために引用されていた(EM, 508)。アンリはここでも二つの真理と言葉を区別する。それは、〈世界の真理・言葉〉と〈生の真理・言葉〉である。「あなたの父はどこにいるのか」と問うて、イエスに「この世」の系譜を求めるファリサイ派の言葉は、「世界の言葉」であり、イエスの言葉は、そうした「世界の言葉」からすれば「沈黙のこだま」になってしまふ呼びかけ、「生の言葉」である。

アンリは、イエスが人間の系譜を求めていることを強調する。イエスが「原・子(Archifils)」であるということは、イエス自身が証しするとともに神が証しする。イエスと神は「生」の自己出生」において一体であり、「この言ははじめに神とともにあった」(ヨハネ一・二)。こうしたことを、「この世」の身分証明にこだわるファリサイ派は理解していない。それ故、イエスは彼らの問いに対して、「あなたたちは、私も私の父も知らない。もし、私を知っていたら、私の父をも知るはずだ」(ヨハネ八・一九)と答えるのである。

イエスのいる「空間」(CMV, 165)は、「父の家」でもあるとともに、オクラホマ劇場のように、生者に対して誰にでも彼らのための場所を用意する。生者は、神とともに自分で自分を証しするイエスとは異なり、自分で自分を証しできず、イエスのいるところを通つてでなければ自己たりえない。アンリからすれば、ヨハネ文書と「オクラホマ野外劇場」でのカフカの文章は、「原・子」の「空間」に内在してはじめて、「子」が自分の場所を得るという「子の内の子」という事態で重なり合うものであり、この意味でカフカは「宗教思想家」であった。

### おわりに

このように、アンリによるカフカ読解をおおよそ彼の著作の年代順に追ってきたが、アンリは、つねに真理との関わりでカフカを解釈していた。哲学と文学がともに真理に関わるものだと考えていたアンリにとつて、カフカは、真理を表現した作家であるとともに、紆余曲折のある真理探究の道について考察した先達であった。アンリがカフカの内に見出したこの真理に関する二面性は、生命の木のもとで安らう「不滅のもの」という真理と、認識の木の実を食べたことにより真理から逸れてしまう経験として、実際にカフカのアフォリズムの内に読みとることが可能なものであった。ここで、カフカは宗教的テーマを用いて真理について考察しており、彼を宗教思想家とみなすことは十分可能である。

カフカを宗教思想家と見なす解釈は多くあるが、カフカが影響を受けたキルケゴールとか、ユダヤ的なものについて考察させる『ヨブ記』や人形劇などではなく、ヨハネ文書やフィヒテを参照するような解釈は、ア

ンリの他には存在しないだろう。このもつばらヨハネ福音書のみに依拠するアンリのキリスト教観は、独特の歪みをともなっており、世界や、イエスの死とその復活に関する事柄が避けられ、真理そのものであるイエス、真理への道であるイエスが重視されている。アンリはこうした生の真理を、カフカのアフォリズムや「オクラホマ野外劇場」に見とり、出自や経歴などの「この世」のものとは関わりのない共同体とそこへの道について考察した。アンリにとって、カフカは生の真理や共同体を考察する宗教思想家であった。

とはいえ、カフカ自身や『失踪者』の主人公カールに眼を向けるならば、アンリのヨハネ解釈が偏頗なものであったように、カフカ解釈にもアンリが選ばなかった真理の別れ道が残されているように思われる。カフカのドイツからもチェコからもシオニズムからも距離のある独特の立場は、「この世」で帰属する共同体の問題、とくに、アンリがカフカ解釈で取り上げなかった言語共同体の問題を投げかけてくるのではないか。また、偽名と虚偽の経歴を用いて劇団に入ったカールは、生の真理の側にいたのだろうか、それとも、世界の真理の側にいたのだろうか。永遠<sup>だ</sup>だけではなくこの世にも開かれたカフカに対して、アンリの小説を通じて接近することは可能だろうか。問いはなお開かれている。

文献略号

ミシェル・アンリ

[EM]= *L'Essence de la manifestation*, PUF, 1963.

[PM]= *Phénoménologie matérielle*, PUF, 1990.

[CMV]= *C'est moi la Vérité*, Seuil, 1996.

[PC]= *Parole du Christ*, Seuil, 2002.

[PV-IIH]= *Phénoménologie de la vie*, Tom III : *De l'art et du politique*, PUF, 2004.

[AD]= *Auto-donation Entretiens et conférences*, Beauchesne, 2004.

フランツ・カフカ

独語の頁数の後の「」内に邦訳の頁数を記した。

[America]= *Amerika*, S. Fischer, 1966. 『失踪者 カフカ小説全集・一』、池内紀訳（白水社、二〇〇〇年）

[NS-II]= *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, S. Fischer, 1992. 『掟の問題ほか カフカ小説全集・六』、池内紀訳（白水社、二〇〇二年）

[JH]= *Journal intime*, Grasset, 1945.

アンリは、カフカのアフオリズム集やノート、日記などの断片については、クロソウスキー訳を用いている。本稿では、ポケット版のクロソウスキー訳(*Journal intime*, Traduit de l'allemand et présenté par Pierre Klossowski, Rivage poche Petite Bibliothèque, 2008.)でも引用箇所の確認を行い、Grasset版の頁数の後の( )内にポケット版の頁数を記した。

モーリス・メルロー＝ポンティ

[VH]= *Le Visible et l'invisible*, Gallimard, 1964.

[Union]= *L'Union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, J. Vrin, 1978.

[Nature]= *La Nature, Notes Cours du Collège de France*, établi et annoté par Dominique Ségland, Seil, 1995.

[SNS]= *Sens et non-sens*, Gallimard, 1996.

[Primal]= *Le Primat de la perception et ses conséquences philosophiques*, Paris, Verdier, 1996.

[Parcours -II]= *Parcours deux 1951-1961*, Verdier, 2000.

ヨハン・ゴットフリープ・フィヒテ

[ASL]= *Die Anweisung zum seligen Leben*, Felix Meiner Verlag, 2012.

注

- (1) Walter Benjamin, "Franz Kafka", *Werke*, Bd. 7, Suhrkamp, 1969. Gilles Deleuze, Félix Guattari; *Kafka, Pour une littérature mineure*, L'Éditions de Minuit, 1975. Jacques Derrida, "Préjugés", *La Faculté de juger*, L'Éditions de Minuit, 1985, 230。
- (2) Michel Henry, *Jeune officier*, Gallimard, 1954.
- (3) Michel Henry, *L'Amour les yeux fermés*, Gallimard, 1976.
- (4) Michel Henry, *Fils du roi*, Gallimard, 1981.
- (5) Paul Audi, *Michel Henry, Les Belles Lettres*, 2006, p.11. オーティは、『若き将校』が「アンリがカフカやキルケゴールの作品に対して抱く称賛を反映したものになつてゐる」(*ibid.*)と指摘する。なお、アンリの小説の研究は、アンリ思想の射程を知る上で今後必要な研究である。
- (6) 以下、引用文中での傍点は、論者による強調。
- (7) 八冊残された八つ折りノートは、後世、年代順にAからHの記号がつけられた。このノートに関しては、中澤英雄、『カフカとキルケゴール』(オンブックス、二〇〇六年)から多くの教示を得た。
- (8) Cf., *NS-II*, 130 [152]
- (9) Paul Audi, *Ibid.*, p.236.
- (10) メルローポンティにおけるキリスト教哲学に関しては、拙論、「メルローポンティにおける哲学とキリスト教」、「立命館哲学」第一五集(立命館大学哲学会編、二〇〇四年)九三—一二頁を参照。アンリに関しては、古荘匡義、『キリスト教の哲学』は可能か——ミシェル・アンリのことばの概念を手がかりに、『宗教哲学研究』二八号(宗教哲学会、二〇一一年)五九—六九頁を参照。
- (11) Nicolas de Malebranche, *Œuvres complètes de Malebranche*, publiées en coédition avec C.N.R.S., J.Vrin, t.XIII, pp.197-222.
- (12) メルローポンティとアンリのマルブランシュ解釈の違いについては、加國尚志、『私は私に触れる』・マルブランシュと現象学・ミシェル・アンリとメルローポンティの解釈を中心に、『フランス哲学・思想研究』一九(日仏哲学会、二〇一四年)一三—二六頁を参照。
- (13) しかし、そうだとすると、「対話IX」でマルブランシュが立てた神の意志を巡る問いが、今度はアンリに対して向けられるだろう。「エゴに先立つて」おり、世界創造以前であり、絶対的・以前である(「生」は、何故、我々「各々の生けるエゴ」を必要とするのだろうか。また、自足する(「生」が我々を必要とするような無力な神ではないのだとした

ら、「未完の作品」が象徴するような発生をアンリ哲学が語る可能性は残されているだろうか。アンリ哲学では、どのようにして新たなものの「到来」や発生が語られるのか。こうした問いは（生）の真理を根拠として検討される必要があるのではないか。

(14) アンリにおけるヨハネ解釈に関しては、佐藤啓介、「ヨハネとアンリ——キリスト教思想からみるアンリの『聖書解釈学』」、『ミシェル・アンリ研究』第四号（日本ミシェル・アンリ哲学会編、二〇一四年）二五—四七頁を参照。

(15) アンリのフィヒテ批判については『現出の本質』第一〇節等を参照。

(16) Paul Audi: *Ibid.*, p.41. 『愛は瞳を閉じて』では、破壊される街が細かく描写される。

(17) アンリの芸術論に眼を向けてみてもよい。

(18) アンリの引用するアフォリズムには、クロソウスキーが引用するものと重なっているものや、引用頁数を「序文」から指示しているものがある。

(19) カフカが「直立」に言及した他の箇所では、むしろ直立の不安が強調される。

(20) 『失踪者(Der Verschollene)』は、マックス・ブロートによって『アメリカ(Amerika)』という表題が付けられ、一九一三年に出版されている。「オクラホマ野外劇場」という章の標題もブロートが付けた。

(21) 共同体については、吉永和加、『感情から他者へ——生の現象学による共同体論』（萌書房、二〇〇四年）を参照。

また、共同体が世代を超える面については、川瀬雅也、「個体と文化——アンリの生の現象学の視点から」、『ミシェル・アンリ研究』第五号（日本ミシェル・アンリ哲学会、二〇一五年）四九—六七頁を参照。

(22) 『失踪者(アメリカ)』は、『変身』や『判決』と同時期（一九一一年冬から一九一二年）に書かれた。カフカは、「火夫」から書き始め（この部分は一九一三年に出版）、一九一四年の休暇中に『審判』『流刑地』を完成させ、「オクラホマ野外劇場」を執筆した。

(23) 板内正によれば、この文章は、農業収穫労働者募集文のもじりであるが、新約聖書との関係を指摘した研究者もいた（『カフカの『アメリカ(失踪者)』(創樹社、一九八九年)二五九—二六〇頁）。板内は、ユダヤ人としての意識を強調した。

(24) 真理の門前で佇む経験という点では「控の門の前で」が示唆的だろう。

(25) 一六歳でボヘミアを追われてアメリカへ渡ることになったカールは、移民船の中で出会った火夫の待遇改善を訴えるが、偶然出会った上院議員の伯父とともにその場を立ち去る。そして、伯父の共同体に属そうとするが、縁を切ら

れてしまう。その後、彼に信頼を寄せる人物にも出会うが、悪意をもった人物たちにも出合いふりまわされた挙句、エ  
レベーター・ボーイをしていたホテル・オクシデンタルという共同体からも追放される。